
イースおちゃらけ短編 「この子誰の子女神の子？」

不識庵・裏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イースおちゃらけ短編 「この子誰の子女神の子？」

【Nコード】

N9069Y

【作者名】

不識庵・裏

【あらすじ】

イースでの戦いを終えたアドルであったが、生まれつきの冒険者である彼は、新たな冒険の地を求めエステリアを去って行った。然し……その一方で、残された娘達に重要な問題を置き土産にしているのだ。

(前書き)

これは、昔とあるサイトに載せていた作品なのですが、途中で放り投げちゃったと言う、自分自身の情けなさを反映させた物でもありました。

連載は無理かと思いましたが、最初の部分だけ読み切りっぽく区切りました。まあ、お眼汚しもいいところですので、お暇な方だけざっと見てみてくださいませ。

イスでの冒険を終わらせたアドルはその後暫くの間エステリアに留まり、人々と共に魔物の襲撃で荒れ果てたエステリアの復興作業に当たった。

ある時は大工に混ざり壊れた建物の修復を手伝い、またある時は農夫と一緒に畑を耕したり、放牧地の整備に当たったりと、まるでこれまでの辛い出来事を無理やり忘れるべく、がむしゃらに時を過ごしていたのである。

そんな日々が三ヶ月程続いたが、アドルはまた旅に出る事を決意した。その事を話したのはかつてダームの塔の虜囚になった時、窮地を救ってくれた元盗賊で親友のドギだけである。

ある晩、アドルはドギを呼び出し自分の決意を話すが、彼は一瞬驚きの表情を見せる物の、その後苦笑いを作り

「しょうがねえなあ。まっ、お前から冒険を取ったら只のアンちやんだ。周りには俺が上手く取り繕っておく、行って来いや」

と最初はアドルの肩を気軽にポンと叩いたのだが、彼なりに思う所があったのだろう、ドギは急に真剣な表情で真正面からアドルの顔を見据え問い掛けた。

「でもよお、皆に悪いからこつそり行くのは判るんだけどな。そのお、何だ。リリアだけには話した方が良いんじゃないかねえのか？ それにあの娘、お前にどうやら気がみたいだし、ある程度はケジメつけるべきだと思っただがねえ〜？」

そこまで言うと、目前のアドルは彼に対して口を挟むような形で話し始めた。

「僕にだって判ってるんよ、ドギ。リリアだけど……彼女の想いに応えられる事が僕には出来ないんだ。だって、僕は……エステリアファイナの彼女の事が頭から離れないんだ！！それに、これ以上ここに居続けると、何だか彼女への叶わぬ想いをずっと引き摺っていそうで、それが物凄く怖いんだ」

「やっぱりか、お前あの女神様の事をまだ……想ってたんだな？」

アドルは苦悶の表情を浮かべていた。ドギ自身は二人の女神（フイーナ、レア）とは余り面識が無く、二人の女神との別れの時もその場に居合わせてなかったので今一つピンと来なかったし、アドル達が戻って来た後で盗賊時代の親分であるゴーバンからその時のやり取りを聞いた程度だ。ましてや、そのゴーバンでさえアドルとフイーナの仲は自分の母親であるジェバからそれとなく聞いただけである。

売春宿で女性とねんごろになる程度の知識なら伝授できるのだが、自分自身も余り色恋沙汰とは縁が無かったのでこう言った話は非常

に苦手だ。

だが、アドルよりは自分の方が年長だし、人生経験もその分積んでいる。ここは一つ人生の先輩として何とかアドルを安心させてやるうと考えた。

「はあ〜判った。リリアや皆には俺がキチンと話しておく。お前はいつその事、全て忘れる位の気持ちで新たな冒険に行つて来いや
！！」

「えっ、ド、ドギ」

「今のお前に一番の特効薬は冒険しかないと思つて！ 行つて来い！ ここに留まつてるお前は何だかくすぶつて見えるしな！！」

5

アドルの両肩を両手で叩きドギは豪快に笑いながら彼を激励した。アドルはそんな彼の心遣いに感謝すると笑顔を整つた顔立ちに浮かべ、

（別名：アドルの必殺技“女殺しの笑顔” 余談だが彼のこの笑顔により、二人の女神を始めとしたエステリアの妙齡の女性陣は彼の虜になつた伝説がある。）

「有難う、ドギ。それじゃ今晚の内にここを発つよ！！」

と言うや否や、あらかじめ用意してあつた旅行道具の入つた背囊はいのうを引っ掴み、護身用の長剣を腰に帯びるとその日の晩の内にバルバドの港を発つた。

だが、然しッ!! この後、度偉い出来事がアドルを待ち受けていたとは、彼自身この時は夢にも思わなかったであろう……（バン・ジヨー風で）

「フィーナ、そしてレア……君達二人があの時くれた温もり、僕は絶対に忘れないよ……」

バルバドの港が遙か後方に見える船の上で、アドルは双子の月が輝く夜空を見ながら、双子の女神との思い出に浸るのであった。

さて、好色一代冒険家のアドルが、エステリアを半ば逃亡同然の形で去った直後のサルモンの神殿の最深部。

ここにはフィーナとレア イースの二人の女神が、黒い真珠を封印する為に永久の眠りについていたのである。

ダムがアドルによって倒された後、二人でその本体である黒い真珠を封印していたのだが……ここで急な異変が起こった。

「ウッ……!!」

昇華して石像と化していた白エメラスの身体に、再び命の灯と生ける者としての色が宿り始め、フィーナは目覚めた。そして、彼女

は自分が立っていた台座から飛び降りると、その場にうずくまり思いつ切りむせ始めた。

「フィーナ……!？」

それにつられたのかレアの方も目を覚まし、妹のそんな姿に持っていた黒い真珠を放り出すと彼女の方へと駆け寄る。その拍子で黒い真珠は地面に落ち、部屋の片隅へと転がって行った。

「ウウツ、ケホツ、ケホツ」

「ちよつ、ちよつとフィーナ、大丈夫なの!？」

激しくむせる妹の背をさすりながら、心配そうに彼女を伺うレア。フィーナの顔にはびっしりと脂汗が浮かび物凄く苦しそうである。暫くして、妹が落ち着くのを確認すると、レアは神殿内の泉から水を汲んできて彼女に与えた。

「フィーナ、お水を汲んできたわ。飲める？」

「ハア、ハア……ありがとうレア。いただくわ」

フィーナはレアから杯に入れた水を受け取ると一気に飲み干し額の汗を拭った。顔は未だ青ざめたままで、何やら思いつめたような

表情である。そんな妹の様子に、レアは人間世界で得た知識や情報を総動員し、まさかとは思いつつ恐る恐る妹に聞いてみた。

「ねえ、フィーナ。もしかしてあなた……」

「うんっ、レア。多分、その“もしかして”かもしれないわ」

「ッ!!!」

予想通りの妹の返事だったが、彼女の中に大きな衝撃が走った。白エメラスで構成された不老不死の肉体とは言えども一応人間の異性との性交渉も可能だ。激しく動揺しながらも更にレアはフィーナに尋ねた。喉は物凄く渴いており、声も上ずりそうである。

「あ、相手は誰？それにいつ頃なの？そんな事があつたのは!？」

レアの顔は物凄く真っ赤である。当然なのかもしれないが、このような質問はする方もされる方も物凄く恥ずかしい事なのである。それに対し、フィーナは深く息を吸うと、姉よりも真っ赤になりながら語り始めた。

「……想像はすぐについたと思うけど相手はアドルさんよレア。あれは丁度三ヶ月くらい前だったかしら、アドルさんがダームの塔へ向かったあの日の前の晩の事だったわ。

あの時寝付けなかった私はアドルさんの部屋を訪ねたの……」

そこまで話すとフィーナは一息つき、レアに「続きを話してもいいかしら？」と言うと、彼女は「お願いするわ」と答えたのでフィーナは続きを話し始めた。

「アドルさんはまだ起きていて武器の手入れの真っ最中だった。夜遅く訪れたのにアドルさんはいつもと変わらない笑顔で、『どうしたの？眠れないの？』って優しく声をかけてくれたの。いつも優しくって私の事を本気で心配してくれたアドルさん……そのアドルさんと永遠に会えなくなるんじゃないのかと思ったら、私、無意識のうちには彼に抱きついちゃったの。その後はもう無我夢中で……気が付いたらお互い生まれたままの姿で朝を迎えたわ」

「そ、そお、そうなの……でっ、でもっ、まだ妊娠したと決まった訳じゃないわ！！」

「レ、レア！？」

「と、取り敢えず落ち着くのよ、フィーナ。きっとこれはコウメイの罠だわ！？」

「え？ 誰なのかしらそれ？」

いつも理知的で冷静沈着な姉が珍しく取り乱している。そんなレアの姿を見て思わずクスツと笑うと、「ええ、わかったわ」と答えた。

「でも、これからどうするの？ フィーナ！？」

「えっ？ どうするって……どうすればいいのかしら？」

「だって……このままでいる訳にはいかないでしょう？ そうだわ、またあの時みたいにアドルさんや六神官の末裔たちを呼びましょう！！ あとリリアさんも呼んだ方がいいわね」

「えっ、でもリリアさんはアドルさんの事を……」

「わかっているわ、でも彼女も信頼の出来る娘よ。協力者は多いにこした事はないわ」

動揺の色をまだ顔に浮かべたままのレアであったが、落ち着きを取り戻した妹に対してそうまくし立てると、早速六神官の末裔とリリア、そしてアドルに念を飛ばした。

『皆さん。以前はご協力をありがとう御座いました。ですが、また私たち姉妹にとって大変な問題が発生しました。大至急女神の王宮へ来て下さい レア』

「アドルさん……また会えるかしら？」

両手を胸の前に組み念を飛ばす姉の姿を横目に、フィーナは期待を込めたのだが、そんな彼女の淡い期待は意外な言葉で裏切られた。

「ごめんなさい、フィーナ……」

「レア？ どうしたの!？」

「あのね、アドルさんに私の言葉が届かないの……」

「どうして？ だってアドルさんはまだここに居るんじゃないのかしら!？」

「どうやら、アドルさんはここを発ったみたいね……」

「ごめんなさい」と、申し訳無さそうな表情になる彼女を見てフィーナは落胆した物の、冒険が大好きな彼の事を考えると仕方のない事かと思いきや苦笑いを浮かべるのであった。

『赤毛のアドル』と呼ばれた冒険家のアドル・クリステイン、嘗て繁栄した古代王国イースの『二人の女神』フィーナとレアの双子の姉妹。この物語は、偉大なる冒険家と呼ばれたアドル・クリステインが、最初の冒険の地であったエステリアで仕出かした『もう一つの冒険譚』の後始末をつけるべく、双子の美少女女神が彼を地の果てまで追いかけると言う物である。

(後書き)

ここまで読んで下さり、真に有難う御座います。

私はファルコム作品、特に80〜90年代の物が大好きでした。その中でも、特にイースシリーズは忘れられない物の一つですねえ〜!!

15歳の時に、当時の友達の家でPC88版のイース?のオープニングを見て、振り向きリアに『ズギューン』とハートをぶち抜かれた物の、その半年後には別の友達からMSX2版の『イース?』をプレイして、ラストのアドルとフィーナの別れにマジ泣きし、その後サントラを買う等イースの世界に可也傾倒していました。

現在は『恋姫十無双 照烈異聞録』を書いている私ですが、数年前には十代の頃好きだったイースに『自分なりのお遊び』を追加して書いてみようと思ったのが、『この子誰の子女神の子』なのです。

まあ、今回は昔書いた物を手直しし、読みきり風に仕上げましたので、これ以降続きを出すかどうかは不明です。

私、不器用なんで同時進行なんて高度テクニクは先ず無理! 続きを出すにしても『照烈異聞録』が一段落つかん限りはやらない積りで御座います。

今回は、昔の私の作風ってこんな感じだったんだよーってのを見せたかっただけなのもありましたので、照烈異聞録に比べ極端に短いのですが、これにてお終いで御座います。

それでは、また〜！ 不識庵・裏でした〜！ 次は照烈異聞録で
お会いいたしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9069y/>

イースおちゃらけ短編 「この子誰の子女神の子？」

2011年11月27日03時09分発行